

世界の焦点

内政の基本方向を転換

その後の華国鋒体制

「工業は大慶に学ぶ」 会議の意義

中国内政の基本方向は、いま大きく、しかも根本的に変わりつつある。去る五月十三日に閉幕した「工業は大慶に学ぶ」全国会議は、このことを強く印象づけるものであった。

この会議で行われた華国鋒主席、葉劍英副主席、余秋里副首相の重要演説を分析してみると、そこに貫かれていく方向は、中国社会工業化への切実な要請であり、具体的には、北京政変以前に、あれほど指弾されていた「四つの現代化」路線の推進にほかならない。

つまり、中国はいまや建前としては「毛沢東思想」を依然として掲げながらも、実質的には、周恩来Ⅱ鄧小平路線へと、はっきり移行しつつあるのである。「今世紀のうちには社会主義の強国を築く」（華国鋒）

「基礎工業の発展を急いで国防工業の基礎を強化し、国防工業をさらに大きく発展させなければならぬ」（葉劍英）といった表現は、かつて唯生産力論とか軍近代化論だとして、さかんに批判されたものであった。

このような転換は、同時に、中国が文化大革命、そして「大躍進」政策に代表される毛沢東型社会主義建設路線から、いまやはっきりと決別しようとしていることを示している。いうならば、最近、一九五六年の毛沢東論文「十大関係論」が大いに重視されていることに示されているように「大躍進」政策以前の「毛沢東思想」にまで回帰し、「大躍進」政策からやがて文化大革命へと接続していった「階級闘争」重視、「政治突出」型の「毛沢東思想」からの離脱を意味しているように思われる。

この点で、去る四月中旬に発行されて注

目を集めた「毛沢東選集」第五巻が、まさに建国直前から一九五七年末まで、つまり「大躍進」政策直前までのものになっていることも、示唆するところ大きいといえよう。

鄧小平の「毒草」に依拠

このような政治方向の変化は、人事にもいち早く反映しており、去る一日のメーデーによって判明したように、军区レベルの人事では文化大革命で失脚した聶鳳智が南京军区司令員になり、省・市・自治区党委レベルの人事では、文化大革命で大きな傷を受けた王恩茂が吉林省党委第一書記になったのははじめ、その他の分野でも旧幹部の復活がさまざまな形で進んでいる。

しかも注目すべきことに、鄧小平の「三株毒草」だといわれ、鄧小平が一九七五年秋にまとめたという党の工作、工業発展、科学院の工作についての三論文を最近入手して読んだところでは、今回の大慶会議の基調は、ほぼ完全に鄧小平の「三株毒草」に依拠していることが歴然とする。このように見てくると、譚震林・全国人民代表大

会常務委員会副委員長が語ったように「鄧同志は秋には復活する」といえるのかもよしれない。

もっとも、鄧小平の再復活に関連して、李先念副首相は、つい最近訪中したある日本人に対し「鄧小平同志は、すでに党の重要な工作を行っている」と言明しており、だとすれば、すでに党副主席もしくは、かつて彼が占めていた党総書記のような地位に復帰しているともみられなくはない。

このような「脱文革」、非毛沢東化という周・鄧路線ないしは実務派路線の大きな潮流のなかで、華国鋒主席は、これまでの経歴からしても、ジレンマが大きいはずであるが、彼自身、このような潮流に逆らうことはできず、むしろその方向に身をまかせているといつてよい。

華国鋒主席としては、むしろ、こうした潮流に乗って自己の権威と指導力を高める以外に選択肢はないのであろうが、そのためには、なんといたっても、党中央を固め、党全体を掌握しなければならぬ。それなくしては、過般の「農業は大業に学ぶ」全国会議や今回の大慶会議のような生産建設

に関する大衆キャンペーンをいくら組織化しても、政治的な安定とはいえないであろう。

なぜなら、中国内政の推移いかんは、これまでの歴史が示しているとおり、ひとえに党中央・党上層のリーダーシップの動向いかんにかかっているからである。

北京政変後八ヶ月近くになるのに、党中央委員会さえ開き得ず、党中央政治局常務委員会の人事（当初の九人中、現在は華、葉の二人のみが健在）の人事さえ補填できないとしたら、それはまだ華国鋒体制の成立とも言い難いであろう。

組織的、制度的認知が必要

もとより、この場合、鄧小平再復活問題がひっかかってくることはいうまでもないが、いまや鄧小平再復活問題は単に去年の天安門事件直後の二つの党中央の決議（四月七日付決議）との関連のみならず、鄧小平問題を通じて、文化大革命への根本的評価、「毛沢東思想」への評価を再検討しなければならぬ、という大きな問題になりつつあるような気がする。

ともかく、中国社会内部には、非毛沢東化の動きが根強く潜在しており、それに比例して、鄧小平への期待が大きいだけに、最近、浙江省、福建省、広東省など一部で「毛沢東批判」が表面化したというニュースは、やはり注目に値する。

華国鋒主席が「四人組」とくに江青夫人をこれほど罵っているのだから、毛沢東の権威がそれにつれて弱まり、やがて毛沢東批判へとつながっていく可能性は当然大きいのである。

こうして、中国はいま、一つの重大な方向転換を行いつつも、内部にはいま一つすっきりしないものを残している。いずれにせよ、華国鋒体制は速やかに組織的、制度的認知を受けなければならぬ。

香港「大公報」の費彝民社長は、この点について、夏までに三中全会、夏に十一全大会、秋に全国人民代表大会というスケジュールを示唆したというが、はたしてそのようなになるかどうか、大いに注目されるところである。

《東京外国語大学教授 中嶋嶺雄》